

犀川上流, 高三郎山の鳥類

(2) 生息期間と個体数の季節変化

上馬康生 石川県白山自然保護センター

BIRD COMMUNITY IN THE UPPER PART OF RIVER SAI-KAWA AND MT. TAKASABURO, ISHIKAWA PREFECTURE

(2) TIME OF OCCURRENCE AND SEASONAL CHANGE IN NUMBER

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center*

I はじめに

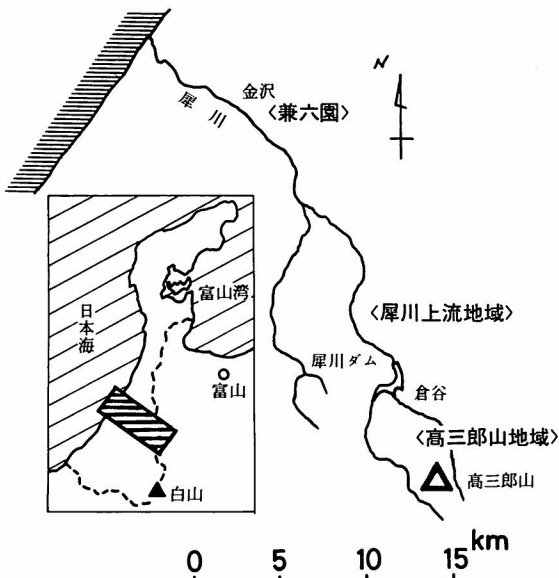
わが国における鳥類季節の研究で、特に個体数、種数の季節変化について述べたものは、ガンカモ科やシギ科、チドリ科など湖沼や海岸性の鳥については比較的多いが、平野や山地の鳥については少ない。その中で最近のものとして清水(1978)、樋口(1976)、藤巻(1973)、唐沢(1971)など

があるが、概して種類相の変化を述べたものが多く、清水のように各種ごとに個体数の季節変化を述べて考察を与えたものは少ない。

筆者は1973年以来白山山系北部の山地で鳥類のセンサスを継続して行っており、その一部はすでに報告したとおりである(上馬1978)。今回は第2報として生息期間と個体数の季節変化について述べ、若干の考察を試みる。

II 調査地域及び方法

調査地域の詳細は第1報で述べたので省くが、その範囲は犀川の上流地域(標高180m~350m)から高三郎山(標高1,421m)の頂上に至る地域である。そしてこの地域は高山帯を有する白山山頂部へと続く稜線の北端に位置することから、平野部と山地を結ぶ地点



第1図 位置図

にあたり、季節によってここを中継地とする鳥の存在が十分考えられる。そこで今回は第1報において明らかになった、犀川上流地域の二次林と高三郎山のブナ林の鳥類群集の季節的な変化の比較を行なうとともに、さらに犀川中流域にあたる金沢市兼六園での記録(板坂1978)とも比較して、同一河川の標高の異なる3地域での季節変化についても述べることにする(第1図)。なお調査方法は第1報と同様である。ただし個体数、種数の集計に用いた資料は5月・6月・10月・11月各6年、7月・8月・9月各5年、4月4年、12月2年、3月1年(毎年1回ずつ)のものである。また生息期間や考察には定期センサス以外の観察記録も参考にした。

III 結果及び考察

1973年4月より1979年3月までに当地域で確認できた鳥類は96種2亜種になる。その中にはほとんど毎回出現するものもあれば、季節によって出現の有無や個体数に変化があるもの、6年間に1回しか出現しなかったものなどがある。そこで全種について、月毎に出現回数を考慮して生息期間を表わすと第2図のようになる。なお1、2月は積雪等の関係で入山困難なため全コースの調査はできず犀川上流地域のごく一部のみの記録である。以下の各論ではこの図をもとに述べる。

〈各 論〉

ガンカモ科

(1) オシドリ 犀川ダムの湖水及びその上流の倉谷川に11月下旬から3月まで5~30羽の群で観察される。夏期には姿を見たことはなかったが、1978年6月に犀川ダム下流の水のよどみに数羽の群を見たとの情報もあり、今後の確認が必要であるが当地で繁殖している可能性もでてきた。

(2) カルガモ 1度だけ1羽を5月に犀川ダムで観察したのみである。

(3) ホシハジロ 11月に4羽の群を犀川ダム上流で観察している。

(4) カワアイサ 11月にダム湖に浮かぶ雌1羽を観察したのみである。移動の途中一時的に立ち寄ったものであろう。

(5) カモ sp. 種名の確認できなかったカモの記録が6度ある。犀川ダム下流で上空を飛ぶ8羽を見た以外はいずれもダム湖に浮かぶ1~3羽のカモである。3月~4月及び9月~11月のいずれも渡りの時期に観察しているので、渡りの途中一時的に立ち寄ったものと考えられ、また上記の4種以外の種がいる可能性が大きい。

なお兼六園ではマガモが9月上旬から11月上旬に、カルガモが12月中旬に、コガモが3月下旬から5月下旬と8月に観察されている。

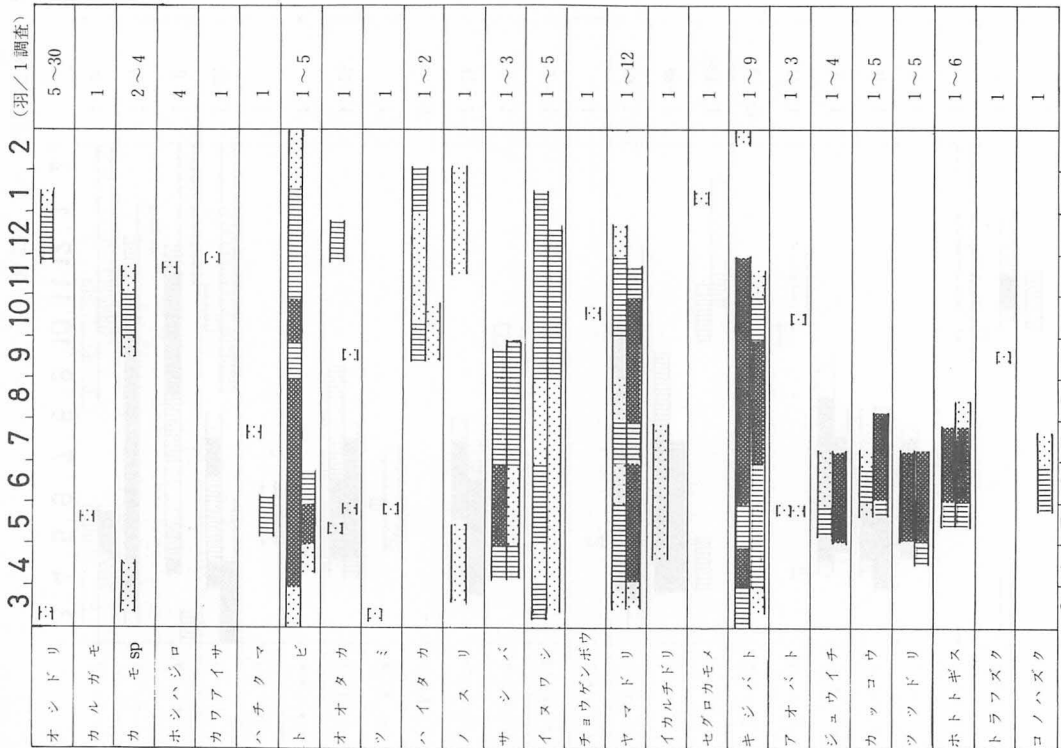
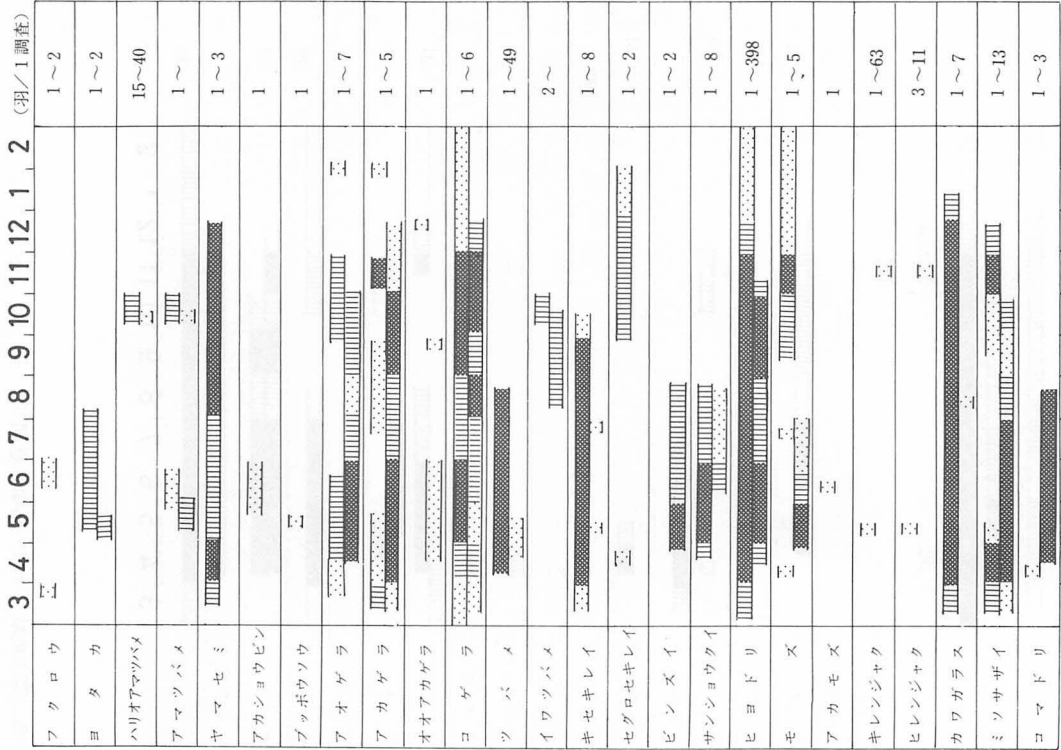
ワシタカ科

(6) ハチクマ 5月に高三郎山の山頂付近で、また7月に犀川上流で、いずれも飛翔中の1羽を観察している。

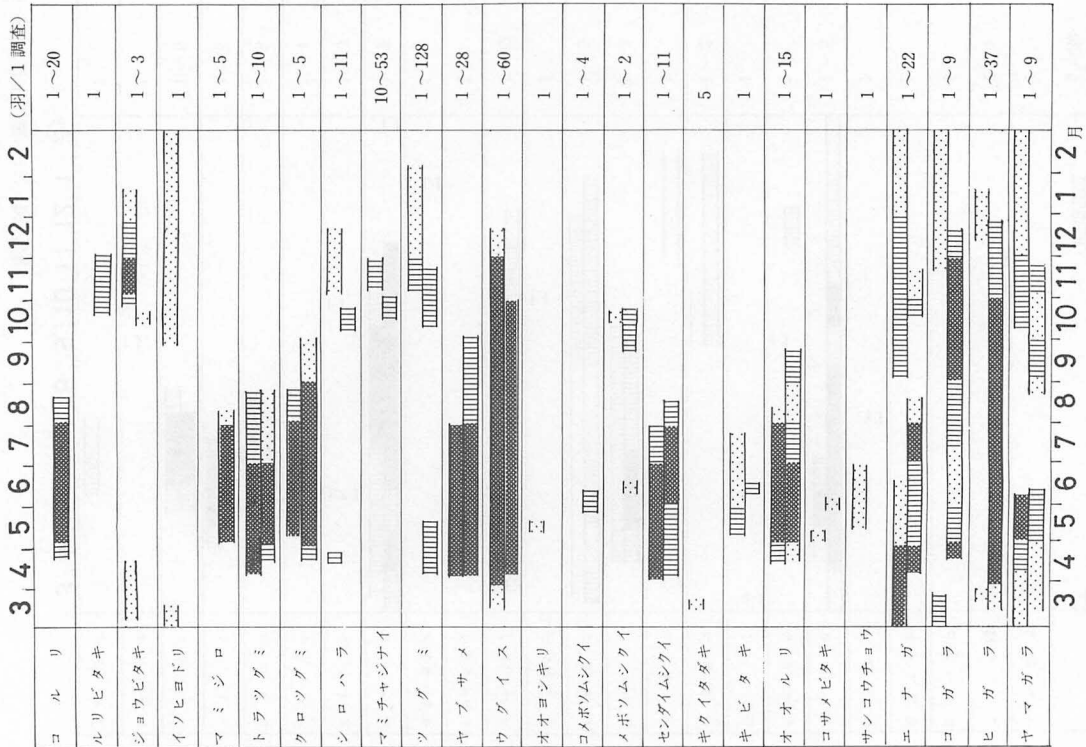
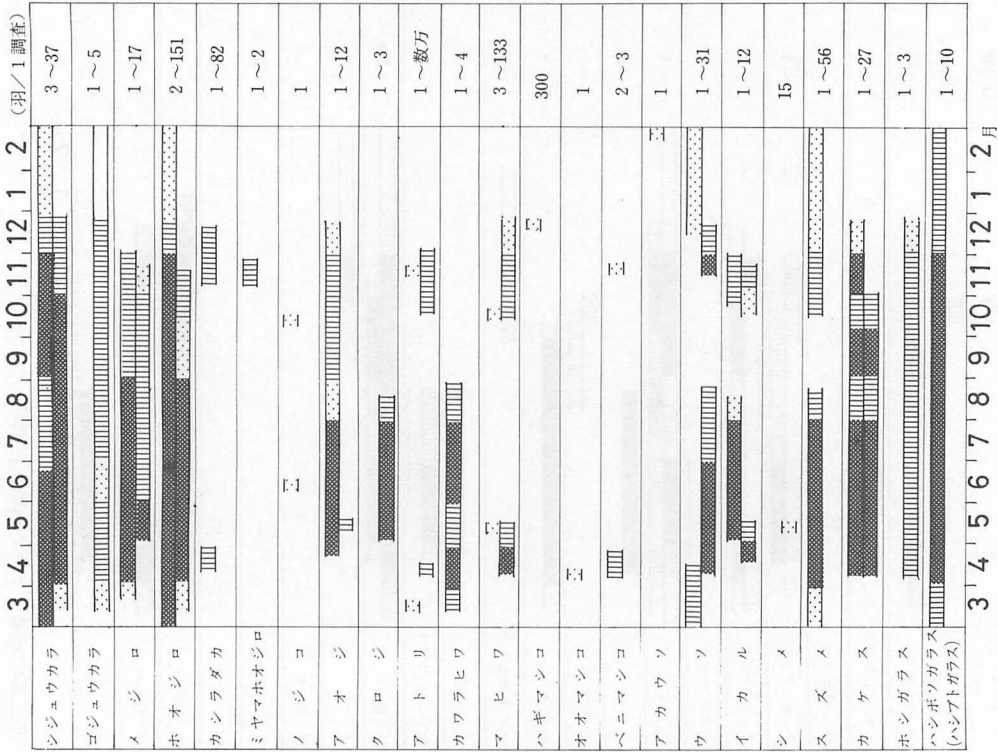
(7) トビ 犀川上流では周年、高三郎山では4月~6月に観察され、1羽または2羽でいることが多い。個体数は多くないが、ごく普通に見られる種である。

(8) オオタカ 犀川上流では5月、11月~12月に、また高三郎山では5月と9月にいずれも1羽飛翔中を観察している。

(9) ツミ 3月に犀川上流で、また5月に高三郎山で1羽観察している。



第2図 (1) 犀川上流地域 (上段) 高三郎山地域 (下段) 鳥類生息期間



第2図 (2) 犀川上流地域 (上段) 高三郎山地域 (下段) 鳥類生息期間

(10) ハイタカ 秋から冬にかけてよく観察され、犀川上流では9月～1月，高三郎山では9月～10月に1羽で見られる。

なお以上3種はいずれも飛翔中を観察しており，遠方の場合など区別する上で困難なことがある。

(11) ノスリ 11月～5月に犀川上流で観察している。いずれも1羽である。

(12) サシバ 犀川上流，高三郎山共に4月上旬から9月下旬まで見られる。特に犀川上流では5月～6月に頻繁に観察される。ただし個体数は多くなく，1回のセンサスで最高3羽である。

(13) イヌワシ 犀川上流，高三郎山ともに周年生息しており，特に秋から冬にかけての観察回数が多い。1974年には営巣及び巣立ちを確認している。なおこの地域には犀川ダム付近を境として2番生息していることを，同時観察により確認している。

ワシタカ類の発見はそのほとんどが飛翔中であるので，見とおしのきく谷間や，山頂付近であることが多く，また落葉後の晩秋から青葉の出る前の春先までのことが多い。したがって今の調査方法ではその鳥が留鳥であるか否かの判断はつけ難い。またイヌワシは比較的多く観察しているが，これは最近特にこの鳥を注目して調査している点も見のがせない。

ハヤブサ科

(14) チョウゲンボウ 高三郎山山頂で10月に1度観察しただけである。しかし繁殖期に白山の山頂付近で2度観察しており，その1度は家族群と思われるものであることから白山山系での繁殖が考えられる。

キジ科

(15) ヤマドリ 犀川上流，高三郎山ともに周年生息しているようである。特に高三郎山ではごく普通に観察され，9月～10月にはブナ林で5～8羽の群をよく見ている。

チドリ科

(16) イカルチドリ 犀川上流で1973年5月から同年8月にかけて観察しているが，この年だけの記録である。

カモメ科

(17) セグロカモメ 冬期に犀川の中流あたりまではユリカモメなどが上ってくることがあるが，調査地域は海岸から直線距離でも20km以上離れており，しかも深い谷間であるので生息は考えられなかったが，1979年1月に犀川ダムの湖水に浮かんでいる1羽を発見した。おそらく川沿いに迷い込んできたものと思われる。

ハト科

(18) キジバト 犀川上流では12月～2月以外にはごく普通に観察され，周年の生息も考えられる。高三郎山でも冬期を除く3月～11月に観察され，特に7月～9月に見る機会が多い。冬期には生息地の標高を少し下げているようである。

(19) アオバト 犀川上流で5月に，高三郎山では5月と10月に観察しているだけである。

ホトトギス科

(20) ジュウイチ 犀川上流，高三郎山ともに観察されるが，犀川上流には少ない。兼六園では観察されておらず低地には少ないようである。5月上旬から7月上旬にかけて鳴き声を聞くことができる。

(21) カッコウ ジュウイチと同じく犀川上流，高三郎山ともに観察されるが，犀川上流には少ない。ホトトギス科4種の中では最も遅く5月下旬に渡来し，8月上旬まで鳴き声を聞くことができる。

(22) ツツドリ 犀川上流，高三郎山ともにごく普通に観察される。ホトトギス科の中では最も早く4月中旬に渡来し，7月上旬まで鳴き声を聞くことができる。

(23) ホトトギス 犀川上流，高三郎山ともに観察され，4種の中では最も一般的な種である。5月

中旬より8月中旬まで観察される。

フクロウ科

(24) トラフズク 9月に高三郎山で1羽姿を確認したのみである。

(25) コノハズク 高三郎山で5月下旬～7月に鳴き声を聞いている。そのうち2度は日中に鳴いていた。

(26) フクロウ 3月及び6月に犀川上流で観察している。

なお夜間調査をほとんど行なっておらず日中も目につきにくい鳥であることから、フクロウ科の鳥の季節変化を調べることは非常に困難である。

ヨタカ科

(27) ヨタカ この鳥も活動が夜間のため調査は十分でない。観察したのは5月～8月であり、調査時間の関係で倉谷で夜明け前に鳴き声を聞くことが多い。

アマツバメ科

(28) ハリオアマツバメ 犀川上流、高三郎山ともに10月に15～40羽の群で飛翔しているのを観察している。

(29) アマツバメ 5月～6月に上空を飛ぶ1～3羽を観察し、10月にはハリオアマツバメやイワツバメとともに100羽以上の群で飛びかうのを観察している。このような現象は山麓のどこかで毎年みられる。

カワセミ科

(30) ヤマセミ 犀川上流全域に観察され、周年生息していると思われる。観察回数は多いが、10月に同時に3羽見たのが最高で、1羽だけのことが多い。その飛翔距離もかなり長く、この地域での生息数は限られている。

(31) アカショウビン 5月～6月に犀川上流でごく稀に鳴き声を聞くだけである。

ブッポウソウ科

(32) ブッポウソウ ダム湖沿いの枯木に1度姿を観察したのみである。

キツツキ科

(33) アオゲラ 高三郎山では4月中旬から10月下旬まで観察され、特に4月～6月には回数が多い。一方犀川上流では3月から6月中旬、9月下旬～11月下旬及び1月に観察しているが回数は少なく、夏には観察できない期間が続く。兼六園においても9月～4月に観察されるだけで夏期に生息していないことから、夏期に山地に生息し冬期にはより標高の低い所ないしは平野部への移動が考えられる。

(34) アカゲラ 犀川上流では冬期に観察することは少ないが周年の生息が考えられ、高三郎山でも周年生息しているようである。高三郎山の方が多く観察され、兼六園でも10月下旬に観察されているだけなので、冬期も山地に残留し、アオゲラのような低地への移動は少ないと思われる。

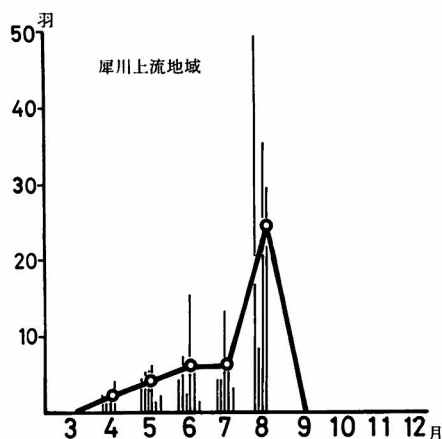
(35) オオアカゲラ 犀川上流で12月に1度、高三郎山では4月～6月及び9月に合計4度姿を確認している。

以上3種のキツツキについては鳴き声による識別が困難なことがある。特にアオゲラの記録は全てアオゲラのみであるが、アカゲラの記録の中には他の2種の記録が含まれている可能性がある。姿による確認は別として鳴き声によるアカゲラの識別は困難である。しかしオオアカゲラはアカゲラよりはるかに少ない。

(36) コゲラ 最も一般的なキツツキで、犀川上流、高三郎山ともに周年の生息が考えられる。1羽～2羽で観察されることが多く、カラの群に入っていることも多い。

ツバメ科

(37) ツバメ 人家との結びつきの非常に強いこの鳥は、犀川上流の寺津地内の集落と犀川ダム管理事務所に集中している。ダムが建設される以前はこの地域に4つの小規模な集落があり、そこには営巣していたようである(熊野・木村1970)。おそらくそこへ渡来していたものの一部がダム管理事務所へ来るようになったのであろう。生息期間は犀川上流では4月上旬から8月中旬までであり、個体数の季節変化は第3図のようであった。この図の棒グラフは各年の個体数で、その月の記録の月上旬のものから下旬のものへと並べてある。また折れ線グラフは平均個体数の変化を示す。以下の個体数変化グラフも同様である。各人家で繁殖したものがしだいに巣立ち、6月ころから群で観察されるようになり、人家を離れた水田地帯にも飛来する。そして8月中旬には30羽～50羽の群になっているのが見られる。8月の5回の記録の中で観察できた最終日は17日であり、21日には見られなかった。また9月には一度も観察されなかった。一方兼六園では3月中旬から9月中旬まで記録されているので、山間部での生息期間が短いことがわかる。また高三郎山では5月に頂上上空へ飛来した1羽ずつの記録が2度あるのみである。なおコシアカツバメは当地域には分布していない。



第3図 ツバメの個体数季節変化

(38) イワツバメ 高三郎山において8月～10月に10羽くらいまでの小群が飛びかうのを観察している。夏期に白山山系の標高の高いところでは多数飛んでおり、繁殖後一部がこの地域まで下っているものと思われる。また10月には犀川上流の上空にも大群が現われる。

セキレイ科

(39) キセキレイ 3月から10月中旬まで観察され犀川上流ではごく普通にみられる。また高三郎山の1,000 m以上まで上ってきたのを時々みることがある。

(40) セグロセキレイ 犀川上流で4月および10月～1月に観察している。第2図をみても明らかのように、キセキレイと生息期間の分離がみられる。キセキレイは4月から9月にかけては常時観察されるのに対し、セグロセキレイは入れ代わるように10月から冬の間観察できるようになる。兼六園では両者共に周年観察されることから、冬期にキセキレイが低地や暖地へ移動した後へセグロセキレイが生息域を広げてきたものと考えられる。

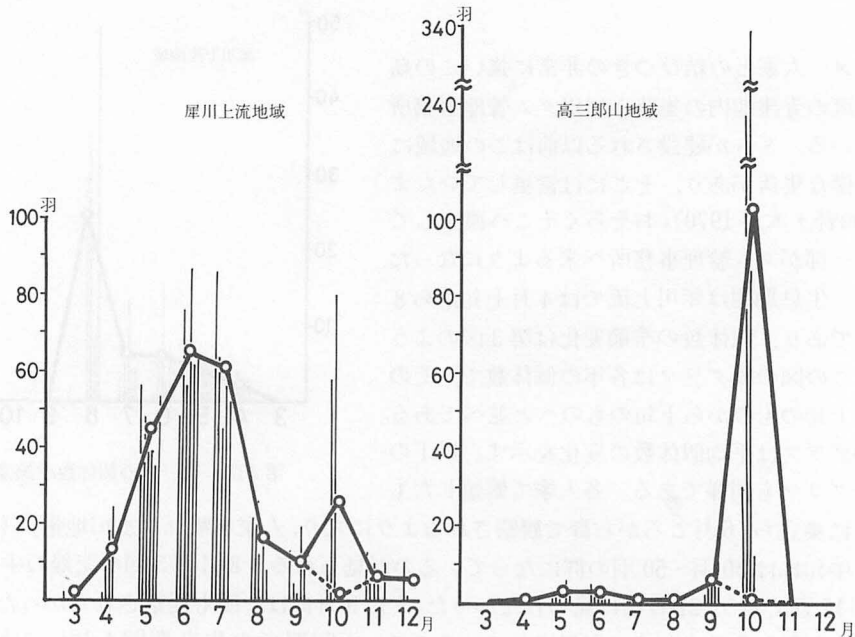
(41) ビンズイ 高三郎山に4月下旬に渡来し、8月下旬まで観察できる。特に渡来直後の5月には毎年観察している。

サンショウクイ科

(42) サンショウクイ 4月中旬から8月下旬まで観察でき、特に犀川上流ではごく普通にみられるが、高三郎山の標高の高いところには少ない。

ヒヨドリ科

(43) ヒヨドリ 犀川上流では周年観察できるが、高三郎山では4月中旬から11月上旬に見られ、冬期には生息していないようである。第4図に個体数の季節変化を示したが、両地域での顕著なちがいがわかる。犀川上流では4月に入って図にも表われているように日ごとに個体数を増し、6月にピークに達する。その後少しずつ減少を始め10月に再び増加している。その後も生息するが春まで個体数は少ない。ただし10月の増加は上空を群が移動したため、これを数えなければむしろ最低値を示し



第4図 ヒヨドリの個体数季節変化

ている。一方高三郎山では4月から9月にかけてごく少数観察されるだけであるが、9月に少し増加することと10月の大きな個体数のピークが特徴である。これも群の移動であり、犀川上流より一段と顕著な増加である。群が観察されるのは10月15日前後で、方向は南西をめざしている。またこれとは全く逆方向の北東をめざす群の移動を、4月下旬～5月上旬にセンサス時間外で観察している。特に秋の群の移動には2種類あり、上空を一直線に通過するものが大部分であるが、谷すじや稜線沿いに小移動しながら進んでいくものもある。これが大群から単に一時的に分れたものか、大群から分れて付近で越冬する群か、あるいは大群とは別で山地から平野部への移動の群であるのかはこれまでの調査資料からは判断し難い。

兼六園では9月下旬から5月までは毎年観察されているが、5月は下旬にいくに従って減少し、6月～7月に観察される年はごく少ない。このことは犀川上流の個体数変化と全く逆の変化をしていることになる。春の大群の上空通過が4月下旬～5月上旬であることおよび兼六園と犀川上流の季節変化を考えるなら、冬期平野部に生息していたものが夏期に山地へ移動していったと考えられる。

モズ科

(44) **モズ** 犀川上流では9月中旬から4月上旬にかけて観察され、秋期、特に11月に回数多く見られる。一方これとは逆に高三郎山では4月下旬から7月下旬まで観察され、5月が最も多い。また兼六園では9月～4月に観察され、犀川上流とほぼ同様の季節変化を示している。これらのことから夏期に山地への移動、秋期に低地への移動が考えられる。ただ同じ鳥がこの両地域を移動しているかどうかは不明である。

(45) **アカモズ** 6月に犀川上流で1度観察したのみである。

レンジャク科

(46) **キレンジャク** 2度記録しているが、いずれもヒレンジャクとの混群である。犀川上流では5月上旬に、また高三郎山では11月中旬に観察している。5月の時はヒレンジャクが多く(11羽)、キレンジャクはごく少数(1羽以上)であったのに対し、11月はほとんどがキレンジャク(63羽)でヒ

レンジャクは少なかった（3羽以上）。一方兼六園では12月と2月～5月に観察されているので冬鳥と考えられるが，山地ではむしろ移動の途中で一時的に立ち寄ったものと思われる。

(47) ヒレンジャク キレンジャクの項参照。

カワガラス科

(48) カワガラス 犀川上流に周年生息しており，ごく普通に見られる種である。個体数は夏期（6月～8月）に少なく，その他の季節は夏期の約2倍観察される。

ミソサザイ科

(49) ミソサザイ 犀川上流では3月から5月中旬及び9月中旬から12月に，高三郎山では3月から10月下旬に観察している。また兼六園では11月～4月に記録があり，そのうち11月と4月の回数は少ない。そして犀川上流では11月と4月に回数多く見られており，高三郎山は4月～7月に多い。これらのことはミソサザイが春に平野部から山地へ移動し，夏は山地に生息し，冬に再び平野部へ下りていくようすを示していると考えられる。

ツグミ亜科

(50) コマドリ 高三郎山で4月中旬から8月中旬まで普通に観察される。しかしその生息場所は頂上付近のごく一部に限られる。一方犀川上流では4月上旬に一度さえずりを聞いている。前記生息場所とはかなり離れており，おそらく渡来したばかりで移動中の個体と思われる。なお兼六園でも移動の途中と思われる時期，すなわち4月から5月上旬にかけてと10月に記録がある。

(51) コルリ 4月中旬に高三郎山に渡来し，8月中旬まで観察できる。この鳥は5月～6月の高三郎山での最優占種であり，その個体数変化は第5図のようになり，6月が最も多い。

(52) ルリビタキ 10月中旬から11月にかけてのみ高三郎山で観察される。白山山系の亜高山帯の針葉樹林や高山帯のハイマツ林には多く，また兼六園では12月～4月にごく普通に観察されることから，高三郎山での例は繁殖地から越冬地への移動の途中で一時的に出現したものと考えられる。

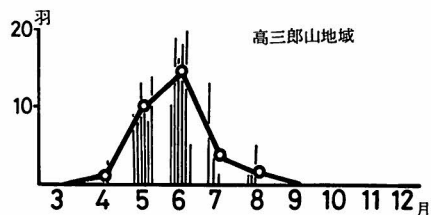
(53) ジョウビタキ 10月中旬に高三郎山で，また10月下旬から4月中旬にかけて犀川上流に生息している。特に11月に多く観察している。

(54) イソヒヨドリ 本来は海岸の岩場などで繁殖し，県内でも能登を中心とした海岸沿いに観察される鳥であるが，1978年の9月下旬から雄1羽が犀川ダムにすみ着いている。富山県では繁殖期以外には富山や高岡市内の都会のビルの屋上などに來ることがある（富山県1977）といわれるが，海岸よりせいぜい7～8km入った平野部である。それに比べ海岸から直線距離で20km以上も離れ，しかも1,000m前後の稜線に囲まれた谷間に生息しているのは特異な例である。おそらく移動の途中で迷い込んだものが，ダム湖及びダムのコンクリートの壁が生息環境に類似していたため定着したものであろう。

(55) マミジロ 5月上旬から8月上旬にかけて高三郎山にごく普通に観察される。1度のセンサスでも多くても5羽である。

(56) トラツグミ 4月中旬から8月中旬まで犀川上流，高三郎山ともに観察される。ほとんどが声による記録で，日の出前，日没後が多いが日中も鳴く。兼六園では2月～4月に記録されており，冬期は平野部へ下っているようである。

(57) クロツグミ 犀川上流では5月上旬から8月下旬に，高三郎山では4月下旬から9月下旬にか



第5図 コルリの個体数季節変化

けて観察される。9月には約5羽の群を観察している。

(58) シロハラ 犀川上流では4月、11月～12月に、また高三郎山では10月に観察している。秋期は群で、4月は単独で見ている。マミチャジナイやツグミに比べると個体数は少ない。

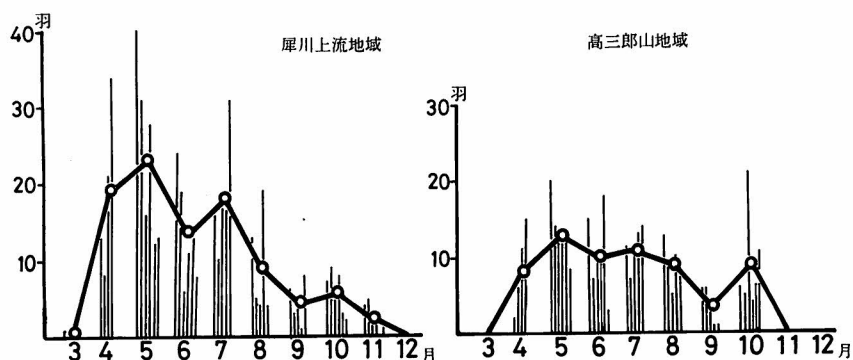
(59) マミチャジナイ 10月に高三郎山で、11月に犀川上流でいずれも群で観察している。

(60) ツグミ 10月中旬に高三郎山に現われ、犀川上流は11月に入ってからである。群の個体数は11月の方が多い。また4月～5月に高三郎山で1～2羽で観察された。なおシロハラとツグミは平野部では冬鳥として普通である。

ウグイス亜科

(61) ヤブサメ 4月上旬に渡来し7月まで犀川上流、高三郎山ともにごく普通に生息している。特に4月中、下旬にさえずり活動が最も盛んである。なお高三郎山では9月にもさえずりを聞いたことがある。

(62) ウグイス 犀川上流、高三郎山ともに個体数が多く、優占度上位となる月が多い。両地域とも冬期の記録がなく、犀川上流のごく一部を除いては生息しないと思われる。個体数の季節変化は第6図のようになる。両地域とも5月が最大で、7月、10月にも小ピークがあることなど同様の変化をしていることがわかる。4月に入ると日ごとに数を増していき、5月上旬に両地域ともさえずりが最も多くなる。その後6月に減少、7月に再び増加している。なお7月はほとんど全てさえずりによる記録であり、8月に地鳴きが少数現われ、9月以降は全て地鳴きか姿の確認による記録である。一方兼六園の生息状況を見ると、9月下旬から翌年の5月下旬まで生息し、11月と4月の記録回数が特に多い。4月の両地域での漸増と10月の小ピーク、および11月に兼六園での観察が多いことを考えるなら、4月が平野部から山地への移動の時期であり、10月～11月が逆に山地から平野部への移動の時期と考えられる。11月に高三郎山で全く見られず、より標高の低い犀川上流で観察されていることもその裏付けとなる。



第6図 ウグイスの個体数季節変化

(63) オオヨシキリ 5月中旬に高三郎山の頂上のチシマザサのしげみで鳴き声を聞いた。移動の途中か、迷行してきたものと考えられる。

(64) コメボソムシクイ 5月下旬から6月上旬に高三郎山で観察している。メボソムシクイとはその鳴き声のちがいははっきりと区別され、平野部でも同時期に旅鳥として通過の途中、一時留まることか確かめられている(石川野鳥の会 1962)。この鳥が平野部だけでなく高三郎山の頂上付近も通過のコースとなっていることが判明した。いずれも標高1,200 m以上のブナ林下の低木林での観察であ

る。

(65) メボソムシクイ 繁殖期に高三郎山から2.5km 南東の見越山付近(1,500 m以上のところ)から白山に続く山域に多く生息していることがわかっている(上馬 未発表)。しかし高三郎山では6年間に1度、頂上付近でさえずりを聞いただけである。おそらく年によっては高三郎山まで分布を広げていると思われる。また9月下旬から10月中旬にかけて、移動の途中のものを高三郎山、犀川上流ともに観察している。ただし、この方はコメボソムシクイとの区別は困難で、両者ともいる可能性がある。

(66) センダイムシクイ 4月上旬に渡来し、犀川上流では7月下旬まで、高三郎山では8月中旬までさえずりを聞くことができる。さえずりのピークは犀川上流では5月、高三郎山では少し遅れて6月である。

(67) キクイタダキ 3月下旬に犀川上流で5羽前後の群を観察している。夏期の生息地は白山山系のより標高の高いところであり、当地では観察されない。また兼六園では11月上旬から4月上旬まで観察されており、当地域での観察例は越冬地より繁殖地への移動の途中のものと考えられる。

ヒタキ亜科

(68) キビタキ 犀川上流では5月上旬から7月中旬にかけて、また高三郎山では6月に観察しているが、個体数はごくわずかである。

(69) オオルリ 4月中旬に渡来し、犀川上流では8月上旬、高三郎山では9月中旬まで観察できる。溪流に沿う環境であるので犀川上流の個体数は多い。

(70) コサメビタキ 犀川上流、高三郎山ともに5月に1度観察しているだけである。さえずり期間が短いことや、声が小さく観察されにくいこともあるが、当地域での個体数はごく少数であろう。

カササギヒタキ亜科

(71) サンコウチョウ 犀川上流で5月、6月に1度ずつさえずりを聞いただけで、これもごく少数しか生息していない。

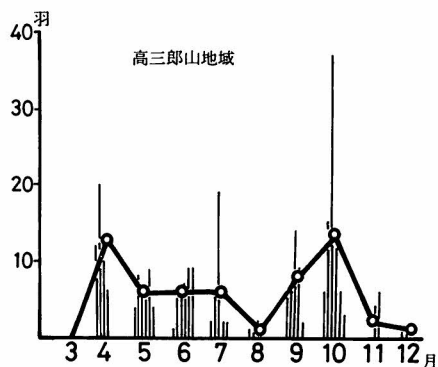
エナガ科

(72) エナガ 季節によって、また年によって観察の有無や群の大小にちがいがみられる。3月～5月は1羽～2羽で観察されるが、6月～8月は犀川上流では記録が全くなく、高三郎山では10羽～15羽の群で、限られたところに集中して観察される。また秋期も群であるが特定のところに集中することとはなく、見られない年もある。

シジュウカラ科

(73) コガラ 犀川上流では11月下旬から3月までの冬期間のみ生息している。一方高三郎山では4月中旬から12月まで観察しており、冬期も生息していると思われる。個体数は6月～7月に家族群が見られる以外は1羽～4羽の小さな群で、他のカラ類との混群で観察されることが多い。特に4月下旬と9月～11月に頻繁に観察される。兼六園では全く観察されていないので、冬期間も一部が標高を少し下げただけで山地に留まっているようである。

(74) ヒガラ 高三郎山では周年生息しており、特に4月～10月はごく普通に観察される。しかし犀川上流ではコガラ同様冬期間のみ観察される。高三郎山での個体数の季節変化は第7図のようであり、4月と10月にピークがあ

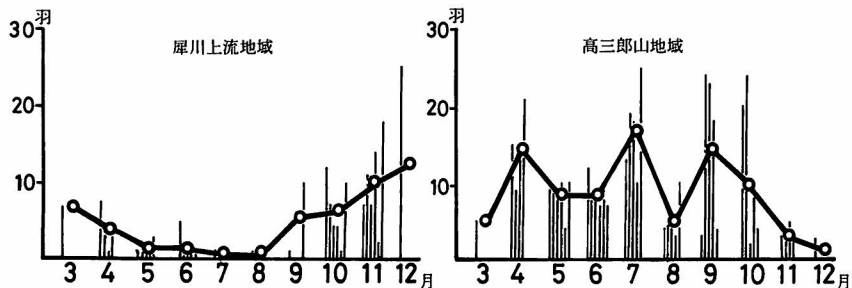


第7図 ヒガラの個体数季節変化

る。一方兼六園では夏期を除き、9月～4月の間観察され、10月中旬～3月下旬には観察回数も多い。これらのことから4月および9月～10月が移動の時期にあたると考えられる。そしてコガラよりも低地まで下りて越冬していることがわかる。

(75) ヤマガラ 犀川上流で5月に回数多く観察される他は、両地域とも年間を通じて回数、個体数ともに少ない。そして犀川上流では6月上旬から10月上旬、高三郎山でも6月中旬から8月中旬の間全く観察されない。同様のことは兼六園でもみられ、5月上旬から8月中旬までの間、10年間にわずか1例のみである。何か共通する原因も考えられるが、今のところ不明である。

(76) シジュウカラ 犀川上流、高三郎山ともに周年生息している。しかし第8図に示したように、



第8図 シジュウカラの個体数季節変化

個体数の季節変化は両地域で大きなちがいがみられる。犀川上流では春から夏に向かって個体数は減少し、7月～8月は観察されない年もある。しかし9月から再び増加を始め、冬に向かって増加していく。一方高三郎山では4月、7月および9月～10月の3つの個体数のピークがみられ、犀川上流とは逆に冬に向かって減少していく。この3つのピークのうち7月はその年生まれの幼鳥による増加であり、他の2つは移動に関連したものであると考えられる。特に冬に向かっての高三郎山での減少と犀川上流での増加の対応している点が注目される。兼六園でも周年頻繁に観察されていることから、冬期に単に標高を下げただけでないことがわかる。低地への移動に加えて、夏期には高木のあるブナ林等の森林に比べて、生活の場としてあまり適していなかった谷沿いの二次林や低木林が、冬になって積雪や気象など、何かの原因でより適した環境になったためであろうと思われる。

ゴジュウカラ科

(77) ゴジュウカラ 高三郎山にのみ周年生息している。ただ4月～7月には頂上付近だけに観察されていたが、8月以降はより標高の低いところへも現われるようになる。しかしブナ林からは離れないようである。

メジロ科

(78) メジロ 犀川上流では3月～11月まで観察され、特に4月～8月には回数も多く、個体数も多い。高三郎山では5月～11月に観察され、冬期は生息していないもようである。一方兼六園では夏期に記録がなく、9月下旬から4月下旬に観察されることから、冬期の低地への移動が考えられる。

ホオジロ科

(80) ホオジロ 犀川上流では周年観察され、高三郎山では3月から11月中旬まで観察される。犀川上流では年間を通じて最も優占度の高い鳥である。その個体数の季節変化は第9図のようであり、4月、7月および10月～11月の3つのピークが認められる。特に10月下旬から11月上旬にかけてのピークは顕著であり、他の季節に比較すると5羽前後の群で分散して観察されるのが特徴である。一

時期にだけ多いことから、これは移動の途中のものと考えられる。12月～2月は調査回数は少ないが、犀川上流の限られたところに少数生息しているだけであり、越冬地はより低地か暖地であると思われる。また高三郎山では3月に多く見られるが、これは残雪の多いこの時期に、本来の生活の場である草原や低木林を離れて、稜線の木でさえづっている個体を多く見かけるからである。

(80) カシラダカ 犀川上流において4月および10月～12月に観察される。移動の途中のものと思われる。

(81) ミヤマホオジロ 犀川上流で11月に2度観察しただけである。

(82) ノジコ 犀川上流で6月と10月に1度ずつ観察しただけである。この地域で過去に繁殖の記録があるが(熊野・木村1970)生息していても個体数はごく少数である。

(83) アオジ 犀川上流で4月下旬から12月中旬まで観察できる。特に4月～7月は観察回数も多い。兼六園では11月上旬から5月中旬まで観察され、夏期には見られない。このことから夏期に山地、冬期に平野部への移動が考えられるが、はたして同じ個体があるような移動をしているかどうかは疑問である。それは冬鳥として北方より渡来してくる群があるからである。

(84) クロジ 5月上旬から8月中旬にかけて高三郎山の山頂付近で毎年観察され、個体数は1羽～3羽である。

アトリ科

(85) アトリ 犀川上流で3月と11月に、高三郎山で4月および10月～11月に観察している。毎回10羽～50羽の群で見かけるが、特に大群を見ることがあり、1976年11月16日には犀川ダム上空を幅約200mにわたって、数万羽に達すると思われる群を観察している。移動の方向は南西から東北であった。その大きさ、高度および進行状態から短距離の移動とは考えられない。その一部は一時的に群本体より離れ、樹上へ下りたり、また群にもどったりしているのを観察している。

(86) カワラヒワ 3月中旬から8月下旬に犀川上流の一部の地区において観察している。兼六園では周年生息していることから、9月以降は平野部等へ移動するものと思われる。

(87) マヒワ 主に高三郎山において、10月中旬から12月および4月から5月中旬に群で観察しており、冬期の生息も考えられる。犀川上流では10月中旬と5月中旬に観察している。

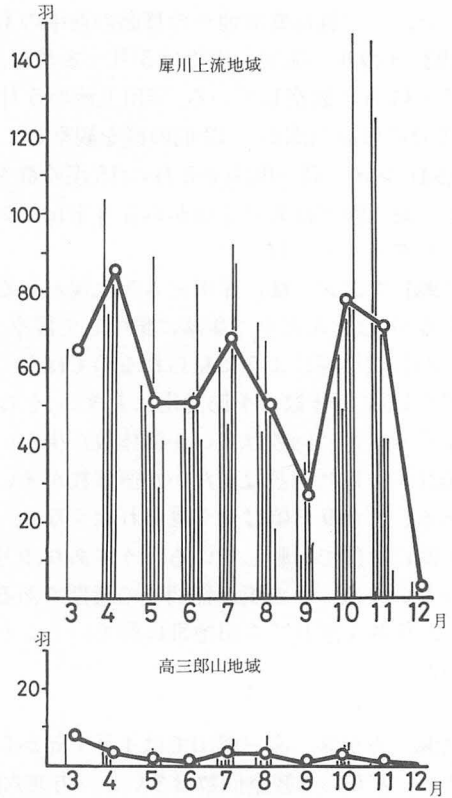
(88) ハギマシコ 1977年12月19日に犀川ダムにおいて地上にいる約300羽の群を観察している。

(89) オオマシコ 1973年4月6日に倉谷で観察した雌1羽のみである。

(90) ベニマシコ 犀川上流において11月中旬および4月上旬～中旬に2～3羽の小群を観察している。

(91) アカウソ 2月に犀川上流でウソの群の中に混じっているのを観察している。

(92) ウソ 高三郎山では4月上旬から12月中旬まで、逆に犀川上流では12月中旬から4月上旬まで観察できる。ただし9月～10月頃は記録がない。ほとんどが1羽～2羽で観察するが、2月と4月にはそれぞれ10羽、30羽前後の群を観察している。特に4月に高三郎山の中腹で見ているが、兼六園



第9図 ホオジロの個体数季節変化

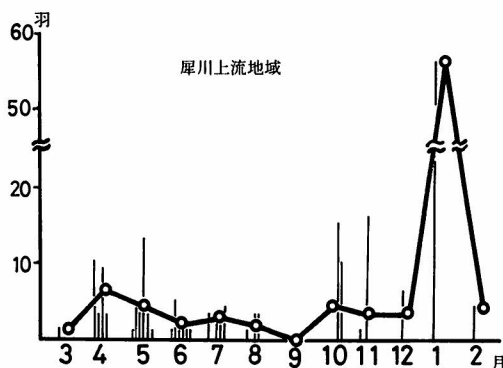
で1月～3月にだけ観察されることや、高三郎山では5月以降頂上付近でのみ観察されることを考えると、この群は繁殖地への移動の途中のものと思われる。

(93) イカル 犀川上流では5月～8月および10月～11月に、また高三郎山では4月～5月および10月～11月に観察している。犀川上流の5月～7月には観察回数も多い。個体数は1羽のことが多いが、11月には高三郎山で12羽の群を観察している。

(94) シメ 高三郎山で5月に15羽の群を観察しており、これは北方への移動の途中のものと思われる。兼六園では8月下旬から5月下旬にかけて生息している。

ハタオリドリ科

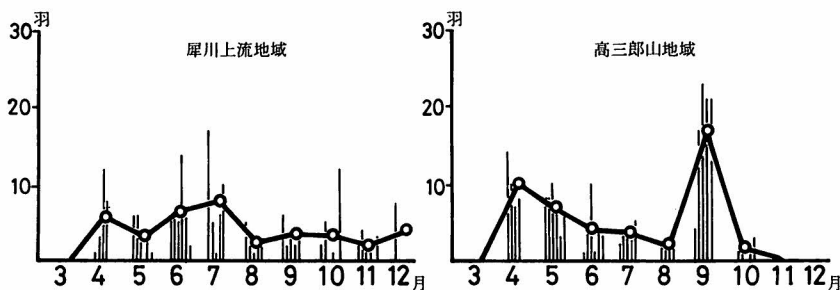
(95) スズメ 稀に犀川ダム等に現われることがあるが、ほとんど全て集落に集中して観察される。しかし周年同じように見られるのではなく、第10図のように個体数の季節変化は大きい。その特徴は、4月～7月に回数は多いが個体数が少ないことと、10月～2月に回数は少ないが個体数が多いことである。また9月頃は全く見られなくなる。秋期～冬期には群で行動しているようであり、9月に見られないのは、この頃が稲刈りの時期であることから、集落を離れて水田地帯に群でいることが考えられる。



第10図 スズメの個体数季節変化

カラス科

(96) カケス 高三郎山では4月上旬から10月下旬に、また犀川上流では4月上旬から12月に観察され、どちらも観察回数が多い。一方兼六園では11月中旬から3月下旬にのみ観察されており、秋期に平野部へ、春期に山地への移動が考えられる。個体数の季節変化は第11図のようである。犀川上流



第11図 カケスの個体数季節変化

では年による変動の大きいことと高三郎山での4月および9月のピークが目立つ。特に9月のピークは顕著であり、この時期の最優占種となっている。

(97) ホシガラス 高三郎山でのみ観察され、4月～12月に見ているが冬期も生息していると思われる。ほとんど全て1,000m前後のヒメコマツのみられる尾根筋での観察であり、個体数は1羽～3羽である。

(98) ハシボソガラス 犀川上流に周年観察される。スズメのように集落に集中することはなく、全域に観察される。この地域で営巣したことがあるが、夕刻に壻(兼六園付近にある)方向へ向うのを観察しており、多くは日中だけ採餌のために飛来してくるものと思われる。なお他の観察者によると

ハシブトガラスも生息している可能性がある。

〈総論〉

(1) 構成種の季節変化

犀川上流地域と高三郎山地域のそれぞれの鳥類群集の主要種の月別優占度(3%以上)は第1表のとおりであり、これを図示すると第12図ようになる。この図は優占度の順に並べたものであり、3%以下については一括して表わしてある。また10月は上空を通過するヒヨドリを集計に入れたものと、入れないものの両方を示した。

犀川上流ではホオジロが12月以外は優占度が非常に高く、1位か2位を占めており、春から秋にかけての最優占種である。またヒヨドリもホオジロに次いでこの期間を通じての優占種となっている。次いでウグイスが多い。このことは第1報で述べた繁殖期の鳥類群集構造が、春から秋にかけてあまり変化していないことを示している。冬期の資料が不足してはいるが、冬期は他の季節とはちがった群集構造をなしている。その特徴は12月のカシラダカ、1月のスズメ、3月のアトリのように群で出現するものが多く、大きな群に出合うか否かで優占順位が上下する。この他各月で特徴的なものとして5月のマヒワ、8月のツバメ、11月のツグミなどがある。また4月～8月のメジロ、9月～12月のシジュウカラの優占度が比較的高いことも特徴である。

高三郎山では犀川上流のホオジロ、ヒヨドリのように、春期～秋期を通じてとびぬけて優占するような種はない。強いていえばシジュウカラが周年優占しているくらいである。またヒガラも周年優占度が高く、5月～8月にはウグイスが優占度1位～2位を占める。

各月で特徴的な種は3月のホオジロ、5月～6月のコルリ、9月のカケス、10月のマミチャジナイ及び上空通過のヒヨドリ、11月のツグミ、12月のマヒワなどである。

両地域を比較すると犀川上流が春期～秋期を通じてほぼ同様な群集構造であるのに対して、高三郎山では季節によりかなり異なった種構成になっている。それは犀川上流が留鳥ないし漂鳥中心の群集であるのに対し、高三郎山が繁殖期の夏鳥と秋期～冬期の漂鳥ないし冬鳥に特徴づけられる群集になっているからである。

(2) 総個体数、種数の季節変化

犀川上流と高三郎山の総個体数及び種数の季節変化を第13図に示す。

犀川上流では総個体数は5月が最も多く12月が最も少ない。そして9月もこれについて少ない。総個体数の変化をみると3月から4月への増加と、4月から7月の安定期、8月から9月への減少、9月を谷として再び増加して11月上旬にピークに達し、その後減少しているのがわかる。種数は5月が51種で最も多く、次いで6月、4月、11月の順であり、8月～9月が26種で最も少ない。5月に多いのは留鳥に加えて夏鳥の渡来と漂鳥や冬鳥が混じるためであり、11月の増加は冬鳥、漂鳥の群での出現によるためである。なおこの地域で優占するホオジロやヒヨドリの個体数の季節変化をみると、総個体数の季節変化がこれら2種の季節変化の影響だけではないことがわかる。

高三郎山では10月の総個体数が最も多く、次いで4月が多い。また12月が最少である。特に10月はヒヨドリの渡りが通過するため一段と多くなっているわけであるが、上空通過を除いた場合でも最も多い。総個体数の変化は3月から4月への急増、4月から7月への安定期、8月を谷として9月から10月への増加、その後の減少がみられる。種数は5月が56種で最も多く、次いで6月、7月であり、3月の12種が最も少ない。特に5月は両地域を通じて最も種数が豊富な時期となっている。これらの変化の要因も犀川上流の場合と同様である。

2つの地域の総個体数の変化を比較すると、春期の増加期、4月～7月の安定期、その後の減少、

石川県白山自然保護センター研究報告 第5集

第1表 主要種の月別優占度

〈犀川上流地域〉

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ホオジロ	42.2	44.0	23.8	25.3	33.0	38.5	37.8	58.5(49.9)	40.9	4.9
ヒヨドリ		6.9	21.1	32.5	29.6	12.6	14.2	(16.2)	3.7	9.0
ウグイス		9.7	10.9	6.7	9.0	6.9	6.5	4.2(3.6)		
シジュウカラ	4.6						8.2	4.7(4.0)	5.7	20.5
アカツツ	32.5							5.0(4.3)		
カシラダカ									3.4	26.2
カツバシ		3.1		3.3	3.8					6.6
ツグミ					2.8	18.6				
ワガラミ							4.8			
エナジ	3.9						5.4	3.4(2.9)	13.9	4.1
メナジ		4.1	3.5					5.0(4.3)	3.8	
ヤマブシ		5.6	3.1	3.6	4.1	4.8				
マシロ	5.2		10.1							
ミソサザ						3.4	4.6			3.3
キジバト										
スズメ			3.3	2.9				3.1		4.9
オオルリ										
オシロイ										4.1
オミヤジ									3.8	
ハシロガ							3.1			
平均個体数	154	197	215	201	205	130	70	134(157)	174	61
種数	28	42	51	43	37	26	26	30	40	33

〈高三郎山地域〉

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
シジュウカラ	20	15.4	10.4	11.2	21.7	14.9	20.3	9.6(4.8)	3.8	13.0
ウグイス		9.0	16.3	13.1	14.1	25.9	4.8	8.8(4.3)		
マヒワ		2.9						10.4(5.2)	20.4	43.5
カケラ		13.6	7.5	8.2	7.9		11.3	13.3(6.6)		8.7
ホオジロ	32	3.2	8.6	4.9	4.6	5.8	24.2			
アカツツ					3.8	8.1				
コノハ			12.7	18.9	4.6	4.0				
アト		13.3						9.1(4.5)	15.3	
アト	16									13.0
ツグミ									27.7	
ミソサザ	16		5.0							
ヒヨドリ			3.6	3.7				(50.6)		
ヤマブシ	4		2.9			3.5	8.7		4.4	
マシロ							3.9	3.0		
コノハ								18.1(8.9)		
キレンジャク					4.4		4.2			8.7
ウソ									16.0	
エナジ		10.4								4.4
ツグミ				4.7	5.9					
ホシガ								4.8		
メナジ								4.3		4.4
アカツツ	4									
ゴキウ	4									
ヤマブシ	4									
ヤブサメ			3.3							
シロ			3.1							
オオルリ				3.0						
オシロイ				3.0						
カマ				3.0						
マシロ					2.8					
平均個体数	25	94	80	78	72	35	71	101(204)	66	12
種数	12	36	56	44	38	36	28	36	23	13

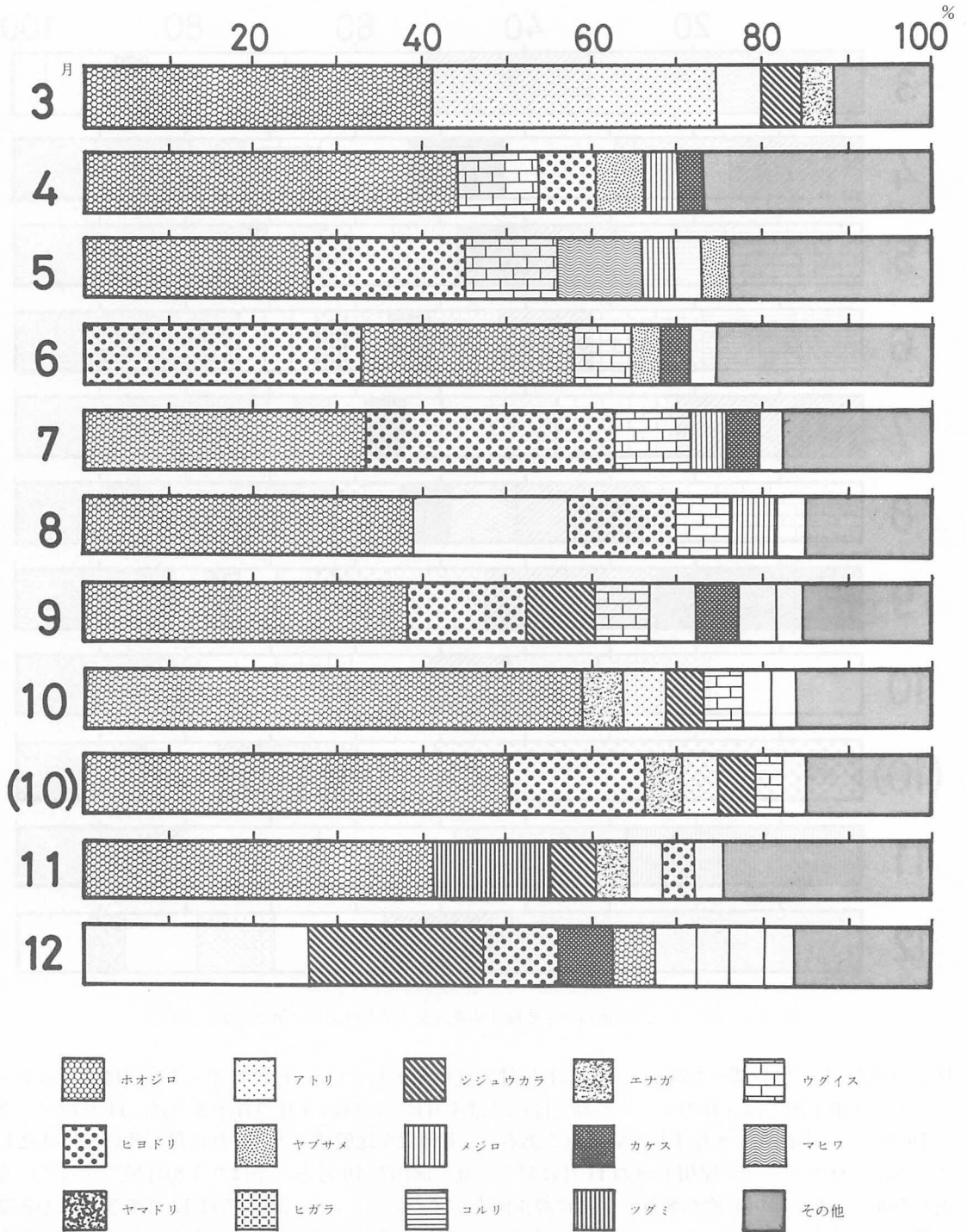
(注) ・優占度が約3%以上の種のみである。

・10月の()内はヒヨドリの上空通過を含めた場合。

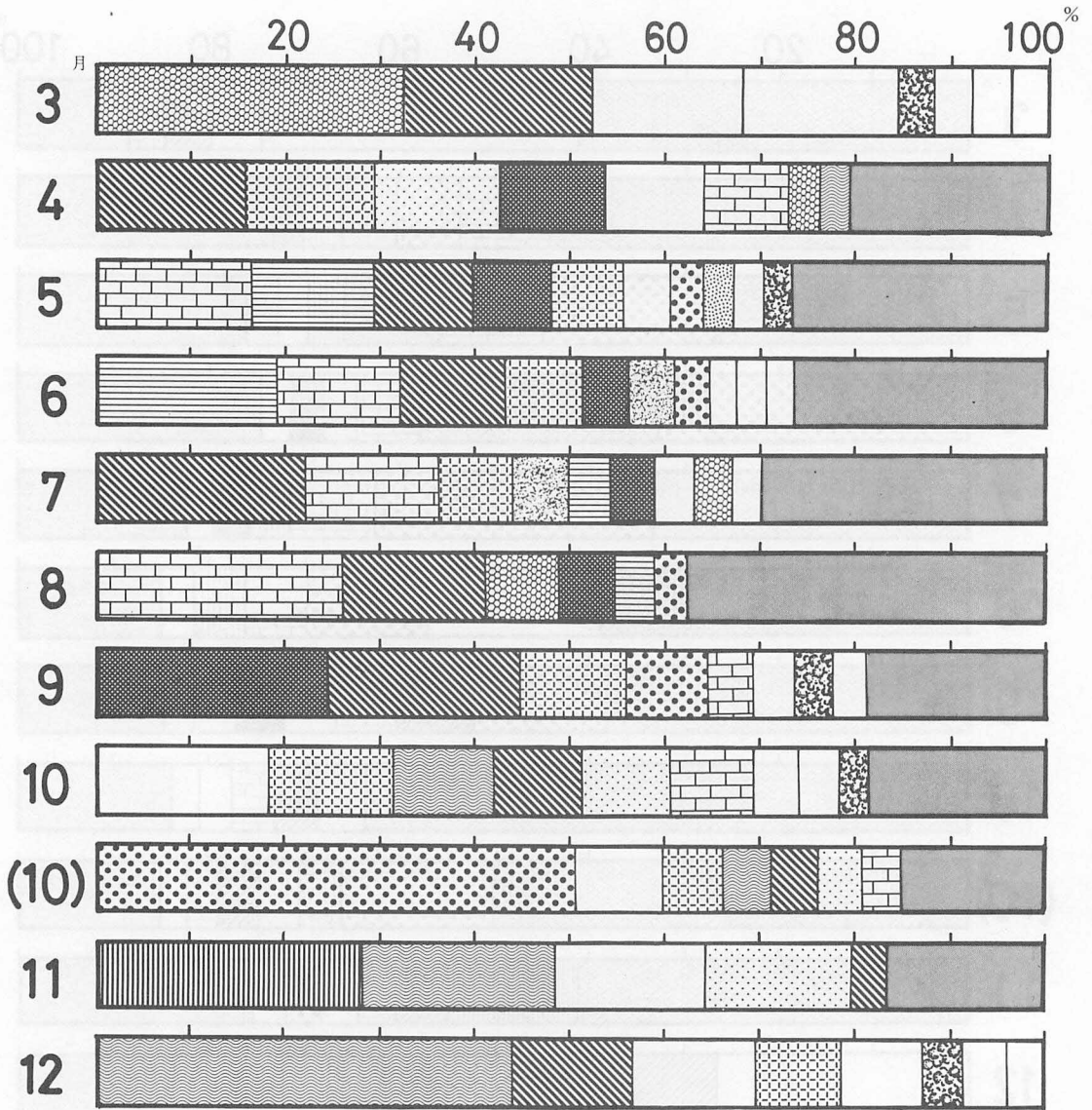
・アトリの大群の通過(犀川上流地域10月)は含まない。

・個体数、種数ともに定期センサスだけの資料による。

上馬：犀川上流，高三郎山の鳥類

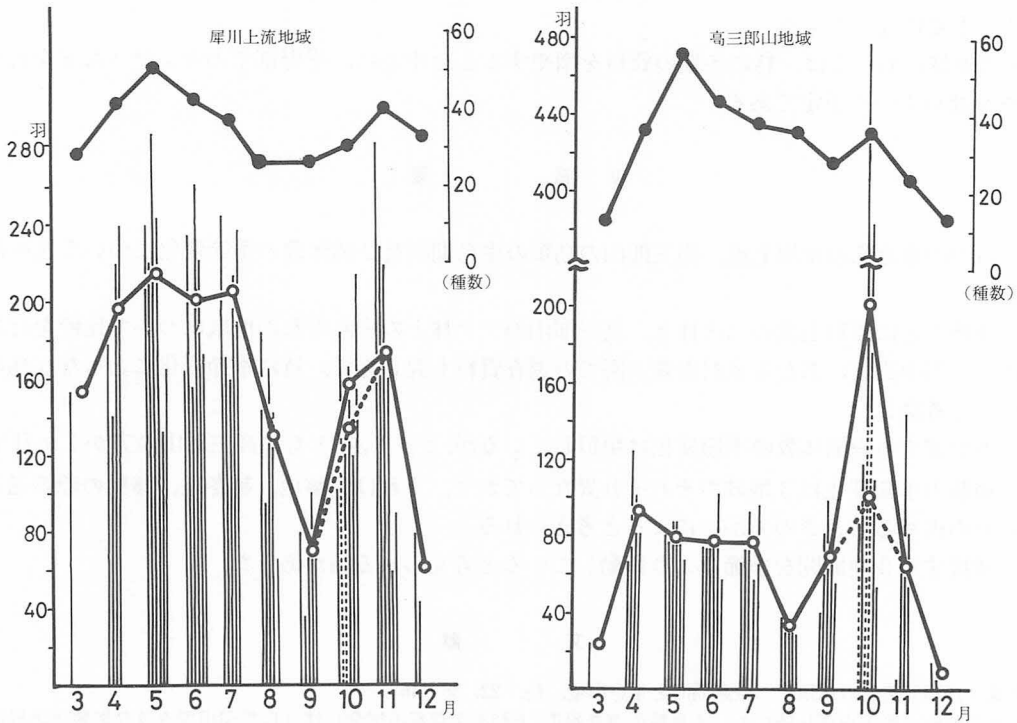


第12図 (1) 犀川上流地域の主要種月別優占度



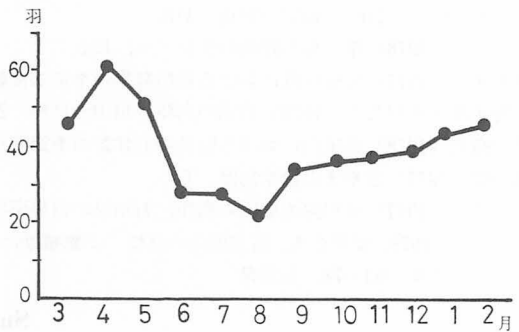
第12図 (2) 高三郎山地域の主要種月別優占度 (図中の記号は第12図(1)と同じ)

秋期の増加,そして冬期への減少とおおむね同様の変化を示している。しかしピークと谷は全くちがっている。犀川上流では5月のピークが高三郎山では4月に,同様に9月の谷が8月に,11月のピークが10月と,いずれも1か月ずれている点である。一方種数を比較すると,5月に最も多いのは共通しているが,秋のピークが犀川上流の11月に対して高三郎山が10月と,やはり1か月早くなっている点がちがう。また犀川上流が8月~9月に最少値を示すのに対し,高三郎山では12月や3月など冬期に最も少なくなっており,しかもはるかに少ない。冬期の調査が困難なために例が少なく断定はできないが,これらのことから高三郎山は繁殖地および移動の際の通過地として占める役割が強く,犀川上流は繁殖地のみならず越冬地としても役割をはたしていることがわかる。



第13図 総個体数，種数の季節変化

また兼六園では，個体数の調査がなされていないので比較できないが，種数のみについてみれば第14図のようになり，4月が最も多く，8月が最も少ない。これは前2地域とはまたちがった変化であり，兼六園が移動の際の通過地，および越冬地としてのはたらきが大きいことを示している。



第14図 兼六園の種数季節変化 (データは板坂(1978)による)

IV おわりに

鳥の中には一年中同じ地域にとどまっている留鳥といわれるものもあるが，季節によって繁殖地，越冬地の条件に適した場所へ移動するものが多い。また同じ種の中にも，たとえばアオジやクロジのように，あるものは夏鳥ないし漂鳥であるのに，あるものは冬鳥であったりする。さらに留鳥といわれてきたものの中にも地域により，また年齢，性別などにより移動するものとしなないものがあることが明らかになっている。このような鳥の渡りについては標識調査による研究が重要視され，また最近ではレーダーやテレメーターによる調査も試みられている。しかし，これらの方法が全ての種について有効とは考えられず，このような方法だけでは鳥の渡りを把握することはできない。その意味からも鳥類季節の調査は重要であり，特に個体数の変化を含めた生息期間の調査が鳥の渡りを考察する上

で極めて重要になってくる。

今後当地域においては、特に冬期の資料を増やすことを中心に、平野部でのセンサスなどを行なって調査を進めていく予定である。

V 摘 要

1) 白山山系北部の犀川上流、高三郎山の鳥類の生息期間及び個体数の季節変化について述べたものである。

2) 各種ごとに犀川上流の二次林と、高三郎山のブナ林とのそれぞれの地域について比較を行なうと共に、犀川中流域にあたる金沢市兼六園での調査資料も混じえて、特に季節変化にともなう鳥の移動について考察した。

3) 両地域での総個体数の季節変化は類似しているが、ピーク、谷ともに高三郎山の方が1か月早い。

4) 種数の季節変化は3地域でそれぞれ異なっており、それは繁殖地、越冬地、移動の際の通過地それぞれの占める大きさのちがいによると考えられる。

5) 隣接する3地域間を季節により移動していると考えられる種があった。

文 献

- 藤巻裕蔵(1973)美唄の鳥類1 生息期間と生息環境, 鳥, 22, 38—46
樋口行雄(1976)上野市南部丘陵における鳥類の調査報告, 上野市南部都市開発に伴う自然環境調査及び影響評価報告書, 109—129
石川野鳥の会(1962)石川の野鳥, 41p.
板坂三郎(1978)兼六園の野鳥の生息メモ, 19p.
唐沢孝一(1971)房総丘陵における鳥類群集の季節的変動, 鳥, 20, 247—267
能野正雄・木村久吉(1970)白山の鳥類, 白山の自然, 231—275, 石川県
清水徹男(1978)高尾山における留鳥の個体数の季節変化について, 東京都高尾自然科学博物館館報, 9, 25—37
富山県(1977)とやまの野生鳥獣, 5
上馬康生(1977)犀川源流地区の鳥類, 石川県の自然環境第3分冊鳥獣, 66—80, 石川県
——(1978)犀川上流, 高三郎山の鳥類 (1)繁殖期における鳥類群集構造, 石川県白山自然保護センター研究報告第4集, 63—78, 石川県

Summary

- (1) This paper was written from a point of the time of occurrence and the seasonal change in number in the upper part of River Sai-kawa and Mt. Takasaburo, north of Mt. Hakusan from April 1973 to March 1979.
- (2) Comparing the result of the study areas with that of Kenroku Park, middle part of River Sai-kawa by another author, next conclusion came out.
- (3) The pattern of seasonal change in total numbers of the study areas is similar to each other, but the seasonal change in Mt. Takasaburo shows a month earlier shift graphically than that of the upper part of River Sai-kawa.
- (4) The seasonal change of species numbers in the three areas differs from one another as the result of the difference of the rate of breeding, wintering and passage areas.
- (5) Some species must migrate from one area to the other with the change of the season.